

●三原則の実践



挙手する子どもたちは、まさに、「学びが楽しくて仕方ない」状態にあると感じました。

そのような授業が生まれた秘訣をA先生に尋ねたところ、返ってきたのは、「学校全体で設定した三原則の繰り返しです」という言葉でした。三原則とは、「学習規律」「リズムとテンポ」「一指示一動作」のことであり、いずれも「個への支援が全体に活きる」というユニバーサルな視点をおさえた、はたらきかけになっています。



日々の授業で繰り返されたはたらきかけは少しずつ子どもたちに浸透し、入学から半年を経た10月には、「気になる子がとけこむ学級集団」が生まれた。私にはちょうどその時期にA先生と子どもたちに出会ったということになります。うれしく、幸せな出会いでした。

Point
A先生の実践に学ぶ
① 学習規律（ルール）という「枠」を提示する

教室でできる特別支援教育

気になる子がとけこむ！ お薦めの小1実践

曾山和彦先生に、日ごろの活動の中で捉えられた、優れた「小1」対応の実践を紹介していただきます。



名城大学大学院 大学・学校づくり研究科及び教職センター准教授
曾山 和彦

そやま かずひこ*群馬県桐生市出身。東京学芸大学卒業、秋田大学大学院修士課程修了、中部学院大学大学院博士課程修了。博士(社会福祉学)
東京都、秋田県の養護学校教諭、秋田県教育委員会指導主事、管理主事を経て現職。学校心理士。ガイドランスカウンセラー。上級教育カウンセラー。学校におけるカウンセリングを考える会代表。

著書に「時々、「オニの心」が出る子どもにアプローチ 学校がするソーシャルスキルトレーニング」、「時々、「オニの心」が出る子どもにアプローチ2 気になる子に伝わる言葉の「番付表」(明治図書)、編著書に「気になる子への支援のワザ」(教育開発研究所)、「特別支援教育に生かせるカウンセリング」(ぎょうせい)ほか多数。

前号にて紹介したように、小学校1年生では約10%の気になる子が学級に在籍しているという調査結果が報告されています^{※1}。これまで、私は各地の学級を参観する中で、気になる子が集団にとけこみ、温かな雰囲気にもまれて学び合っている学級に数多く出会ってきました。1年生のうちから学級集団になじむ子どもは、学年が進行しても、教師による配慮と工夫により、きつと同様に集団になじんでいく。期待とともに、私はそう考えています。

Eエリクソンは児童期の発達として、「勤勉性」自ら決めたり、周囲から与えられたりした課題に協目もふらず取り組む」を挙げています。それゆえ、児童期は「知識生活時代」とも呼ばれます^{※2}。

私は日々、心が動いたことをブログに綴っています。各地の学級を参観する中で、「まさに知識生活時代！」と心が動く実践がありました。本稿では、それらの中から特別にお薦めの三つの実践を紹介いたします。当時のブログを振り返りながら、実践のポイントを整理します。

「枠」の提示により活動への見通し、安心感が生まれる。「机上に何も出さない」「必ず発表者の方を見て聞く」等は枠の一例。枠の大きさは年齢や気になる子の状況等によつて異なる。

② **リズムとテンポを工夫する**
一定のリズム(ルーティン)により活動への見通し、安心感が生まれる。「導入はゲーム的活動、展開は個からグループ活動へ」等はリズムの一例。一定のリズムに、テンポのアップダウンを取り入れることにより、活動への集中を持続できる。「短冊カード」「タイマー」等はテンポ操作の一例。

③ **「一指示一動作」による言葉かけを徹底する**
「教科書を持ってね」という一つの指示であれば、子どもは「教科書を持つ」という一つの動作を行いやすい。「教科書を持って、椅子も持って、前の方に集まりなさい」等、複数の指示が入る言葉かけは、聴覚的な短期記憶に弱さのある子どもにとっては動作選定が難しくなる。

三重県・A先生の実践

1 三原則による授業づくり

ブログ「KAZU・和・POCKET」より
2008年10月18日

「授業名人」に出会う

先日、ある小学校1年生の授業(算数)を参観。子どもたちが時間いっぱい集中して学ぶ姿に、「ああ、これが知識生活時代か…」と感動しました。担任の先生が練りに練った「作戦」に、子どもたちが心地よく乗っている…そんな印象を受けました。

子どもが「種」であるならば、教師のはたらきかけは「水」や「光」。「種」が芽を出し、大きく育つために、たつぷりと「水」「光」が当たったすばらしい授業でした。また、「授業名人」に出会いました。

私はA先生の授業を参観したとき、本当に驚きました。参観前、気になる子が数名在籍していると聞いていましたが、該当児がどの子なのかわからないほど、皆がキラキラと輝いた表情で授業に参加していたからです。A先生の問いかけに、元氣いっぱい返事

三重県・B先生の実践

2 ユニバーサル支援と個別支援による授業づくり

ブログ「KAZU・和・POCKET」より
2011年11月21日

よい実践に学ぶ

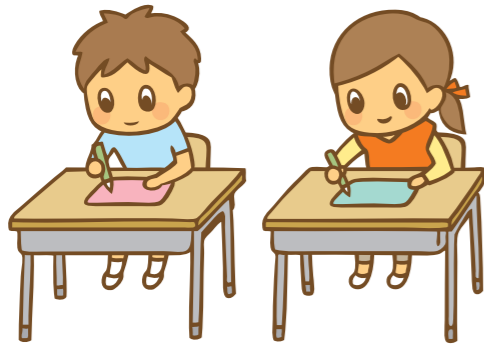
今日はある小学校1年生の授業(国語)を参観。保育園からの引き継ぎでは、気になる子どもたちとして数名の名前が挙がっていたという学級。入学後からこれまでもさまざまな「事件」があったとか。それでも、今日の授業はすばらしかった! 担任の先生が、日々のさりげない配慮により育ててきた子どもたちの力が見事に「開花」している場面が数多く見られました。「発表者に身体を向ける」「合図によって姿勢を直す」「発言に対して反応する」等々。4月、「山の麓」から歩き始めた子どもたちが今、かなりの高みに登ってきている…担任の先生、お見事です!

B先生の学級は20名弱の児童のうち、約半数が保育園時代から発達相談を受けたことがあるという状況。中でもX君は、学力的には高いものの「言いたい、認められたい」という思いが強く、指名されなかったり、わからなかったりすると、大声で叫ぶことが多い「気

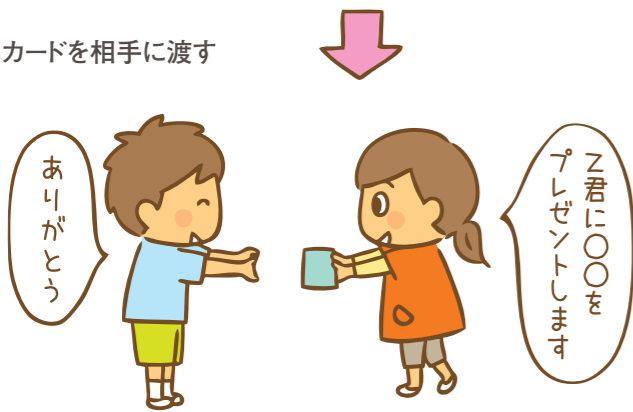
※1 文部科学省「通常の学級に在籍する発達障害のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」2012年
※2 松田文子・高橋超「生きる力が育つ生徒指導」北大路書房1997年32-34p
※3 南 博「心理学がわかる事典」日本実業出版社1983年161p

● 伝われ、私のありがとう

・「ありがとうカード」に「好きなもの」を1つ書く



・カードを相手に渡す



ます。私が参観したのは、以下、C先生による「伝われ、私のありがとう」※4です。

SST「伝われ、私のありがとう」

- 1 子どもは、先生が用意した「ありがとうカード」に「好きなもの」を1つ書く。
- 2 書き終えたカードを隣の席の友だちと交換する。
- 3 Aさんがカードを見ながら「Z君に〇〇をプレゼントします」と読み上げ、Z君は「ありがとう」と言っカードを受け

取る。一人が終えたら交代しに行く。

ターゲットスキルに取り上げた「ありがとう」を、子どもたちの耳、口、身体になじませたいと願うC先生は、活動時間中の「立ち姿」として、「笑顔&ありがとう」を繰り返す、子どもたちに見せていきます。C先生を見てみると、参観の私までもがうれしくなるのですから、子どもたちであればなおさらです。

ロールプレイのやり方を教える

1 楽しいかわり遊びの中に、教師は確かなねらいをもつ

教師はSSTのねらいをしっかりと意識する必要があるが、子どもには「トレーニング」という意識が生まれないように配慮する。「ありがとうカード」のような工夫をし、楽しい雰囲気の中で友だち同士のかかわり合い遊びを設定することで、子どもは知らず知らずのうちにスキルに触れる。

2 短い活動を繰り返す

気になる子の中には友だちと

Point

C先生の実践に学ぶ

C先生の配慮もとても細やか。「子どもと一緒にモデルになってやって見せる」「絵や文字カードを使い、わかりやすくやり方を説明する」等は、気になる子を含む全ての子どもに対するユニバーサルな支援でもあります。

この演習は「ありがとう」を伝え合うだけの簡単なものですが、教室は一瞬にして温かな空気に包まれます。日頃、暴言が気になる子もカードをもらうと、笑顔で「ありがとう!」「ありがとう!」には、魔法の力があるようです。

『教室でできる特別支援教育「王道」ステップ1・2・3』(仮題) 曾山和彦 著

来春2月、文芸堂から刊行予定 ご期待ください!

「通常学級における特別支援教育」について、各地の学校現場の実践に触れ、私の中で「これが『王道』(最も正統的な道)」と感じた、誰もが配慮・工夫により実践できる支援の考え方を整理してみました。1つでも2つでも読者の目にとまり、明日からの実践の「背中の一押し」になることを心から願っています。(本書「まえがき」から)

のかかわりが苦手な子どももいる。まずは10分程度でできる短いSSTの活動を繰り返すこと、かわりになじんでいく。

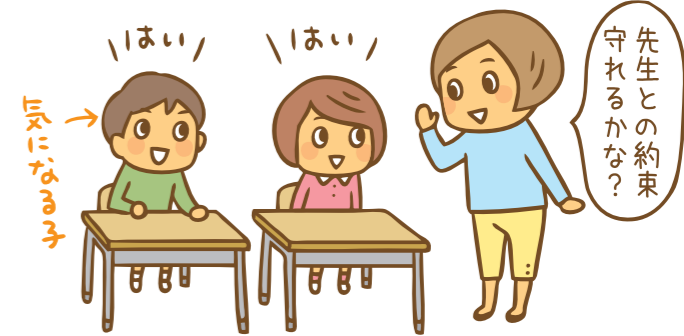
3 他の場面で強める・広げる

SSTによって灯った「小さな火」が、真に使えるかわりのワザとして「大きな火」になるには、学校生活のさまざまな場面での強化や一般化が必要。係の仕事ががんばっている姿を見たら「ありがとう」、友だちに優しくしている姿を見たら「ありがとう」等、教師の温かな言葉かけにより、「ありがとう」が子どもの耳、口、身体になじんでいく。

※4 岸田優代「伝われ、私のありがとう」河村茂雄(編)『教室復帰エクササイズ』図書文化2002年102-103p

● 「気になる子」への対応方法

・前もって伝える



・そっと寄り添い、指さしする



「気になる子」への対応方法

● 自分の手紙を読んでほしいとすねないように↓全員分は読めないことを前もって伝えておく。

なる子」。そのような学級状況で私が参観したのは国語「たぬきの糸車」の授業でした。学校共通指導事項の「個別支援を集団指導の中にどう位置づけるか」という授業づくりの視点が、B先生の授業には見事に具現化されていたと感じました。

● 指名されないとき大声で叫ばないように↓指名されなくても我慢する約束を前もってしておく。

● 発表者の方を見るように↓よい姿勢をほめる。

● わからないとき大きな声で叫ばないように↓どこを読むかわからないときなど、机間支援でそっと寄り添い、指さしする。

X君への「前もって伝える」「ほめる」等は、周りの子にとってもよいよいユニバーサルな支援になって

Point

B先生の実践に学ぶ

1 発達障害の特性を理解し、「王道」から歩き始める

ADHD、PDD等の発達障害に見られる「セルフコントロールが苦手」「見通しがもちにくい」等の特性に配慮した支援として、「外発的な動機づけ(褒美の活用)」「予定伝達」等が考えられる。各発達障害の支援には、「王道(正攻法の基本形)」がある。「王道」の前に「王道」から歩き始めたい。

2 全ての子どもへのグループにボールを投げる

教師の言葉かけが、気になる子に集中すると、学級の中で「〇〇君は特別でいいなあ」と感じる子が出てくる。教師からの言葉という「ボール」を受ける「グロ

います。「そっと寄り添い、指さしする」等は、さりげない配慮によるX君への個別支援になっていきます。B先生によるさまざまなたらきかけは、X君が目立つ支援ではなく、学級全体にとけこむような支援。「思わず拍手!」の授業風景でした。

ブログ「KAZU・和・POCKET」より

教師の立ち姿

2012年10月3日

今日はある小学校の授業(朝の会)を参観。1年生から6年生まで、どの学級も、子どもたちがいい表情で、友だちとのかかわりを楽しんでいる様子。Very good! ベテランの先生方の授業のすばらしさといったら、それはまさに「プロ!」。授業構成、リズムとテンポ、適切な介入等々、本当に勉強になりました。そして、何よりも学んだのはその「立ち姿」。「凜」(態度が引き締まっているさま)として、「倫」(人として踏み行う道)を説き、「鈴」(リンリンと学びの音が教室に広がるさま)と響き合う。教育のプロとして目指したい姿の1つをそこに見た一日です。

3 SSTを活用した関係づくり

石川県・C先生の実践

「プ」は全ての子どもがもっている。気になる子に多めに「ボール」を渡すならば、「特別に見えない」さりげなさが大切である。